








審査結果報告書

2019 年 2 月 8 日

主 査 氏 名	宮 地 鑑	
副 査 氏 名	青 山 直 善	 
副 査 氏 名	阿 内 康 雄	 
副 査 氏 名	石 川 信 行	 

1. 申請者氏名 : DM15007 柿崎 良太

2. 論文テーマ :

Impact of underlying plaque type on strut coverage in the early phase after drug-eluting stent implantation

(冠動脈プラークの性状が薬剤溶出性ステント留置後の新生内膜による被覆に対して与える影響)

3. 論文審査結果 :

本論文は、薬剤溶出性ステントを留置された3か月以内に施行された冠動脈内光干渉断層法を用いて、冠動脈プラークの性状がステントストラットの新生内膜被覆に及ぼす影響を検討した研究である。17症例、22本のステントを対象としてステントの両端5mmに存在する180の断面から1793個のステントストラットを解析し、ストラットが圧着している血管の性状と新生内膜被覆の有無、新生内膜の厚さの関係を調査した。ステントストラットが圧着している血管の性状と新生内膜を詳細に評価し、正常血管に圧着しているステントストラットではプラークに圧着しているストラットよりも新生内膜の増殖の程度が低いことを示した。また、冠動脈の性状の違いによって新生内膜被覆の程度が異なる機序について、臨床研究のみならず病理や動物実験などの先行研究の結果を用いて論理的に考察を行っている。ROC解析では、ステント内血栓形成のリスクに対する正常血管構造に圧着したステントストラットの割合のカットオフ値を算出した。これにより、長い薬剤溶出性ステントを用いてプラークを超えた正常血管にまでステントを留置するよりも、冠動脈イメージングを用いてプラークの存在する血管長に応じた薬剤溶出性ステントを用いることが好ましいと結論付けた。本研究の内容は、経皮的冠動脈インターベンションの治療戦略における極めて重要な知見および臨床的示唆を含んでおり、学位論文として相応しいものとする。